

# 大謝名の獅子舞

市指定無形民俗文化財



<撮影：呉屋善昭>

毎年旧暦八月の十五夜の豊年祭に大謝名区公民館広場で行われています。

大謝名の獅子はオスで、普天間の獅子はメスといわれていることから、「イキガシーシ(男獅子)」、また「けんかシーシ」とも呼ばれています。

魔物を払うとされていて、「獅子の按司加那志、部落の守護神、悪魔災難や、払て給り」という歌が伝えられています。

獅子舞を演じることを「シーシーケースン」といい、獅子を被るメーカーンジャー・クシカンジャーと獅子を誘い出すワクヤーが登場します。

ワクヤーの鈴で誘われた獅子は、四方に向かって2回、中央で3回噛みつく舞を2回繰り返します。

戦前までは、七月十五夜と八月十五夜・十六夜に行われ、近隣の集落から見物人や商売人が多く集まりました。

戦争により中断しましたが1976(昭和51)年に33年ぶりに復活しました。



■ 戦前の大謝名集落イメージ図

# 察度王伝

昔、謝名村に奥間大親<sup>ウツヤ</sup>という貧しい男がいました。「森の川」へ水浴びをしに来た天女に一目惚れし、結婚したい一心で飛衣を隠しました。その後、二人の間には一女一男が生まれ、男の子は「察度<sup>サツト</sup>」と名付けられました。ある日のこと、天女は子ども達の歌を聴き、飛衣を見つけました。そして悲しみながらも天に帰っていきました。

察度は成長し青年になりましたが、畑仕事はせずに海釣りなどで遊び暮らす毎日でした。ある日、勝連<sup>アジ</sup>按司が婿を探していると聞き、勝連に向かいました。按司と家来は察度の汚い格好を見て馬鹿にしましたが、按司の娘は察度の徳を見抜き、嫁入りを決めました。

察度の屋敷は垣根も壊れ、雨漏りもしていましたが、汚れた竈<sup>かまど</sup>をよく見てみると黄金で出来ていました。驚いた妻が聞くと、察度の畑には大量の黄金が転がっていました。当時、牧港には大和の商船が出入りしており、察度は黄金を売って鉄を買い、農具を作って民衆に与えました。

民衆の心をつかんだ察度はやがて、浦添城の按司となり、その後中山王に即位し明との貿易を正式に始め、東南アジアにまたがる交易の礎を築きました。



## 編集・発行 / 宜野湾市教育委員会文化課

〒901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩 1-1-2  
TEL.098-893-4430

## 編集協力 / 株式会社アートリンク

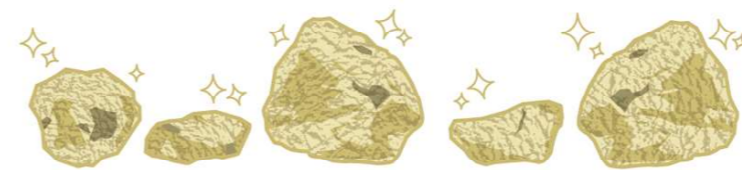
〒901-0146 沖縄県那覇市具志 3-17-22  
TEL.098-894-5397

印刷 / □□□□□□□□□□

〒000-0000 沖縄県〇〇〇〇〇〇-〇〇-〇〇  
TEL.000-000-0000



# 大謝名歴史文化遺産マップ



# 大謝名について

宜野湾市の南西部に位置し、古くは真志喜・大山を含めて「ぢゃな」と呼ばれていました。大謝名には後に中山王となる察度が居住していたと伝わるクガンナー(黄金宮)や、大和商船と交易を行ったと伝わる場所など、察度とゆかりのある場所が残っています。浦添間切に属していましたが、1671(康熙10)年、首里王府による宜野湾間切新設に伴って、大謝名村・大山村(謝名具志川村)・真志喜村の3か村に分かれました。

集落は碁盤目状に形成され、集落西から北側には琉球王国時代の宿道である中頭方<sup>なかがみほう</sup>西海道(現在の国道58号)が通っています。米どころとして知られ、肥沃な田園が集落西側の港田原<sup>ナトゥラバル</sup>に広がっていました。軽便鉄道が開通した際には、宜野湾村に大謝名他2か所の駅が設置されました。

1945(昭和20)年の沖縄戦で、住民の多くは嘉数高地から戦火が南下した時に米軍の捕虜となったようです。人々は北谷を経て具志川のトゥールーガマで約1年過ごした後、野嵩収容所に居住しました。その後、米軍からの命令で真栄原十字路付近に移住し、1950(昭和25)年に元の集落に戻れました。

1964(昭和39)年に大謝名区となりましたが、その後、上大謝名にアメリカ人向け賃貸住宅、港田原に県営大謝名団地や大謝名小学校が建設されたことから、人口が著しく増加したため、1979(昭和54)年に大謝名団地自治会と上大謝名自治会が新しい行政区として追加されました。

## ■ 宜野湾市全域図

